インバウンド観光に関する政策提言案作成委員会

先進事例調査（白馬村議会）概要

１　日　時　　令和元年１１月１５日（金）午後１時００分～２時００分

２　場　所　　白馬村議会 3F　全員協議会室

３　調査者

委 員 長　望月　勝
副委員長　古屋　雅夫
委　　員　浅川　力三　　白壁　賢一　　桜本　広樹
　　早川　浩　　猪股　尚彦　　藤本　好彦
　　鷹野　一雄

欠席者
　委　　員　大久保俊雄

４　対応者

白馬村　太田雄介観光課長
白馬村観光局　福島洋次郎事務局長

５　調査事項　インバウンド観光に関する取り組みについて

６　主な質疑応答

問）　夏季のインバウンド誘客に力を入れているとの説明があったが、例えば香港の人たちを招待して、ホテル、食事を提供し、自国に戻って売り込んでもらうといったとき、多分キックバックがあるかと思うがその方法を教えてもらいたい。

答）　謝礼といったものは払ってない。彼らはメディアといってもフェイスブックの管理人で、台湾の中で登山やアウトドアが好きな人が集まるフェイスブックのページを管理している。彼らにとっては、ただで白馬に行けて、話題・素材も提供してもらえ、また、自分たちのページに「いいね！」をしてくれる人たちとコミュニケーションが取れる場を、我々のお金で用意しても

らえるわけだ。彼らにとっては、うまみしかない。我々としても、フェイスブックを見て白馬に来てもらえる。

問）　ブロガーといった人たちは、世界中に結構いて、その人たちと連携し、キックバックを渡し、送客してもらうといったことは、結構行われている。その財源として、目的税をつくって、そのお金からキックバックをしようといったことも結構やられている。白馬もそういったところまでやっているのかと思った。

答）　そこまではやっていない。というのも、そうしたことをしてしまうと、金の切れ目が縁の切れ目みたいになってしまうので。台湾に営業に行き、台湾の人たちを連れて来てくださいと言うと、では、県から補助金をどれだけ取ってくれるかという話をされる。台湾は本当に補助金漬けになっている。そういうもの（補助金）はないがお客さんを連れてきてと言っても、話をしてくれない。そのため、非常に不健康な状態で、お客さんが来ている形になっているので、我々はそこには余り手を付けず、地道にやっていったほうが将来的にはいいのではと思っている。

問）　新潟県の糸魚川と言っていたが、国交省の観光圏構想みたいに両県にまたがってやっていくということであろうか。今の説明では、白馬村に来たお客さんを糸魚川のほうで欲しいから送客しているというイメージだが、新潟に来た客をこちらのほうに誘致する活動は行っているか。ウインウインの関係になると思うが。

答）　正直言って、新潟県側には白馬村に来てもらうほどの客数が来ていない。特に糸魚川のあたりでは、日本人の観光客も来ていない。糸魚川はどちらかというと観光というより、カニやアンコウといった水産業で成り立っている。

問）　今、泊食分離がトレンドだが、私は、富士河口湖町というところから来ているのだが、今はホテルにはインバウンド客が多く、みんな泊食分離である。周りには今までやっていなかった焼き肉屋が復活したり。ただ、中には日本食を食べたいとか、ホテルでは食べたくないような茶わん蒸しももう一度食べてみたい外国人客もいる。

答）　そういう客もいる。午前中に行かれたしろうま荘では、地の物が多い。

しろうま荘の丸山支配人とは、同級生であるが、冬場は忙しいから本当は夕食をつくりたくないそうだ。でも、外に行くのが面倒だから食事をつくってと言われ、結構忙しくなるそうだ。

問）　外国人はほとんど泊食分離である。最近は日本人も泊食分離になっている。

答）　食事に関しては、平成24～26年くらいにインバウンド客が増えてきた頃、夕食難民という言葉が生まれた。宿泊者が外で食事をしたいのだが、時間帯が集中するので限られた数の店ではどうしてもあぶれてしまう。そこで、村としても解決していこうということで、これは商工の取り組みだが、創業・起業を促す取り組みを始めた。ことしで5年目になって50名くらいが創業している。そのうち飲食・小売が20社くらい。言葉はなくならないが、問題は緩和されているという手応えがある。

問）　やっぱりそれはお客さんが来るから、それによって、いろんなものが必要になってきて、それを施策の誘導で補助金を出しながらでも、この地域をもっていくか、その方向に流れていくか。ここだけだとだめだけど、周りの市町村、もしくは他県を巻き込んでいくことによって、総体的に変わっていって、その頂点が白馬村であると、そういうイメージで作り上げている。

答）　全てをこの村の中で賄おうとしても、人口的にも経済的、エリア的にも厳しいので、いろんなところで補完しながら……。

問）　さっき言われたようにホテルの中に全部取り込んだら、その客は満足しない。同じように、この地域で１つだけよくしても絶対満足しないから、周りを取り込んでいって、いろんなルートができたり、遊ぶものができたりして、初めてその客がその地域を選んでくれる。

答）　よく言われているのは、札幌の日本ハムファイターズの移転問題で、ボールパークという構想がスポーツ界でにぎわったが、アメリカの野球場はスタジアムと呼ばずにボールパークと呼ぶ。なぜかというと、お父さんは野球を見たいけど、ほかの家族みんなが野球を好きじゃないから、お父さんは野球場に行きづらいと。でも、奥さんとか子供たちを連れてっても、楽しめるように、スタジアムが変わればいいということで、ショッピングができたりとか、おいしいものが食べられたりとか、携帯でゲームできたりとか、とい

ったふうにしたら、売り上げが物すごく上がったそうだ。お父さんが気兼ねなく奥さん、子供も連れてくるようなことができたからという。それを地域でつくり上げていくというのが、多分一番いい理想の形なのかと思う。

問）　インバウンドのプラス効果とマイナス効果という説明（住民アンケート）の中で、白馬のイメージダウンという話があったが、どの様にイメージが悪くなると考えるか。

答）　このアンケートでは、オーバーツーリズムで環境が悪化し、敬遠されるのではといった意図で選択肢に挙げた。

　例えば、ニセコでよくあるのだが、スキー場が混んでいて快適に滑れない、日本語が通じない等。そういった言葉がひとり歩きすることで、イメージが悪くなるかもしれないという意図でのアンケートだったが、イメージダウンにはつながらないと皆さんが思ってくれているのはよかった。

問）　インバウンドを進めていく方向性は変わらないということか。

答）　そうである。やはり、平日稼働ということを考えると、インバウンドとシニアの二択しかない。であれば、両方とも取り込みたい。

以上